

ラホヤ村通信

(7)

高垣愉佳

言葉と配慮

「メリークリスマス」がキリスト教徒のみを特別扱いしているの、近年は「ハッピーホリデー」という言い方が推奨されている話は以前にも取り上げた。今回は言葉に込められた配慮の例として、まず映画でもよく出て来る「なんてこったい!」を取り上げたいと思う。直訳としてまず頭に浮かぶのは「Oh my God!オー・マイ・ゴッド」。実際始めて耳にしたのは、買ったばかりのホットドッグのソーセージのみを、飛んで来たカモメに見事にかっさらわれた女性が叫んでいた時だった。初めて耳にした時は、こちらの方こそ「なんてこったい!」と叫びたい気持ちだった。私の「なんてこったい」の奥にあった気持ちは「本当に Oh my God!とか言ってるよ。」だったのだが、他にも色々ないい方があり、ネイティブの人達は割と頻繁に口にすると段々分かって来た。他にも、ダッシュしたものの、一歩間に合わずバスに乗り損ねた学生さんは「Oh my Guh!オー・マイ・ガシュ」と叫んでいたし、インターナショナルセンターのボランティアさんはしょっちゅう「Oh my Heaven!オー・マイ・ヘブン」と叫んでいた。友人の旦那さんの車で出かけた時、駐車場が見つからなかった時に彼が「Oh my Goodness!オー・マイ・グッドネス」と言っていた。

「今、Oh my goodness って言ったよね。オー・マイ・ゴッドっていう人やオー・マイ・ガシュっていう人とか、中にはヘブンとか言う人が居るけど、グッドネスとどう違うの?」と聞いてみた。「意味は同じだよ。でも、アメリカって色んな人が居るからね。神を信じてる人も信じていない人も。神を信じてる人がオー・マイ・ゴッドって聞いたら、そんな所で神を使うなと思うかもしれないだろ?グッドネスは宗教関係ないから、どこで誰に使っても大丈夫な言葉だから。僕は仕事で色んなお客さんに会うからね、この言葉を使うようにしてる。」との事だった。大人しい性格の人でも「なんてこったい」は普通に口にしていたので、この「なんてこったい」が自然に口をつくようになるのはアメリカンナイズされた一つの目安になるのかもしれないと思ったが、やはり私も根っからの日本人のようで、残念ながら今日まで遂に口にするには至らず、「Wao!ワーオ」と少しオーバーに言うくらいが関の山のままで。

『色んな人への配慮』という事に関して、他にも手紙の名前に付ける敬称?が挙げられる。私が日本の学校で習ったのは、男性には Mr.未婚女性には Miss、既婚女性には Mrs.だった。が、アメリカのコミュニティーカレッジの英語クラスで習ったのは、そ

れとは異なっていて、女性は全て「Miz」にするというものだった。それは、既婚か未婚かという事で様々な事を感じる人が居るし、男性は既婚未婚問わず「Mr」なのに、女性だけ結婚してるか否かで表記を変えるのは差別であるという考えから、既婚か未婚かによらず女性には「Miz」をつけるべしという事だった。

まだ学校教育に導入されるには至っていないが、「She」や「He」をやめて、誰に対しても「They」を使ってはどうか? という意見も出てきている。実際場面では「They」を使っている人を見た事はないが、「Guy」を使っている人は時々見かけた。女性の話をしてるのに「Guy」って??? と思って理由を尋ねてみたが、残念ながらその人の回答は「うーん、よく分からないけど、最近ではテレビドラマとかでもよく Guy 使ってるし、こっちの方がカッコ良くない?」という回答だった。多分、「They」にしても「Guy」にしても、トランスジェンダーの方たちの事も含めた配慮からなのではないかと思う。誰に確かめたわけでも無いので、これは全くの憶測に過ぎないのだけれど。

その他にも差別に通じないようにとの配慮から、あからさまに国籍や人種を尋ねたりする事もマナー違反とされていた。「where are you from? あなたどこから来たの?」という尋ね方は良く使われていた。この聞き方は OK らしい。というのも答えを選ぶ余地があるからだ。答えは「West side. 西の方」でもいいし「California カリフォルニア」でもいいし「La Jolla ラホヤ」でもいいし、「Japan 日本」でもいい。もちろん嘘を答えるのは良くないが、

嘘にならない範疇で、その時々シチュエーションに最もふさわしい答え方を選ぶ余地を、答える側に残した問い方だと思う。大勢が集まる国際パーティーなどで東洋人を見かけるとつい「Are you ○○?」「日本人?」「中国人?」「韓国人?」などと声をかけたくなりがちで、実際そうして声をかけている人も見かけるが、一歩間違えば「いきなり国籍聞くなんて、この人ももしかしてレイシスト?」というような誤解を招く恐れがあるという事は頭の片隅に入れておいた方が良くもしい。

このように、アメリカでは使う言葉に対する配慮をよく感じた。一流ホテルなどに行くと、何となく「マダム」と言われるのではないかという気がしていたが、残念ながらそんな事は一度も無かった。間違っても「奥さん」とか「お母さん」とか「お姉さん」などと呼びかけられる事も一度も無かった。それは「マダム」が英語ではなく、実はフランス語であるという理由からだけではなく、アメリカ社会なりの配慮やマナーが背景にあるように思う。酒屋さんでビールを買おうとしたところ、子供と間違われて「お嬢ちゃんにはアルコールは売れないなあー。」と言われ、身分証明書を見て実年齢を知ると「どんな魔法を使ったらこの年齢でそんな見た目になるんだ?」と大爆笑しながら謝られたという事はあった。

私には子供は居ないのだが、日本では友人の子どもと遊んでいる時などに時々勘違いされて「お母さん」と呼びかけられる事がある。こういう時にはかなり複雑な心境になる。市場や百貨店の食料品売り場などを歩いていけば「奥さん」や「お姉さん」と呼びかけられる事は日常茶飯事だ。「奥さ

ん」や「お姉さん」でない人がこのような呼びかけをされたら、恐らく「お母さん」と呼ばれて私を感じるのと似たような感覚に襲われるのではないか?と思う。言葉にしてみると、「私の事呼んでるんだろけど、それちょっと私とは違うんだよなあ。。。」という違和感のような感覚だ。もっと極端に感じる人であれば、勝手に決めつけられた事に傷つく事だってあるかもしれない。

どこに行っても、誰と話していても「You」もしくは「ゆか」とファーストネームで呼ばれる。相手がホームレスの人の時にも、ものすごく有名な人だった時にもそれは変わらなかった。この気持ちの良さ、自分自身という存在が丸ごと認められているという感覚。筆舌に尽くし難いこの感覚を味わってから、私は英語嫌いが直ったを乗り越えて英語が好きになった。

チップ

アメリカで食事をするとチップを払わなければいけないというシステムがある。強制ではないけれど半強制のようなもので、レシートにチップという欄があり、いくらチップとしてあげるかを記入するようになっている。飲食費のだいたい10%~20%の範囲内の金額を書くというのが一般的だ。サービスがとても悪くてチップを払いたくないと思ったなら、もちろん0円でも構わない。逆にサービスに感激したのもっと払いたいと思うなら、いくら払っても良い。そうしてお客さんからもらったチップの行方がどうなるか?というのは店によって違うらしい。1日毎に全てのチップの総額を従業員の数で割って均等に分配される店もあれば、そのテーブルを担当した

人にチップのほとんどが直接渡る店もあるようだ。同じお店でも親切な店員さんもいれば、不親切な店員さんも居る。親切な店員さんと不親切な店員さんの落差があまりに激しい時には、レシートのチップ欄は0円と記入して、親切にしてくれた店員さんに直接チップを手渡してもいい。

このチップ制度、日本人には馴染が無いので抵抗感を示す人も居るが、私は気に入っていた。ラホヤ村で人種差別を受けた事はほとんど無かったが、一度ダウンタウンのカフェに行った時にラズベリーパイとアイスコーヒーを注文したのだが、何度言ってもオーダーが伝わらないという事があった。「は?発音が悪すぎて何を言ってるのか分からないわ。」と言われて、それを真に受けた私は色んな発音やイントネーションで何度も何度もオーダーを繰り返した。途中で、遠くの方に居た店員さんが「ラズベリーパイとアイスコーヒーですね。すぐご用意します!」と叫んで私の方に走って来てくれた。そして先ほどから私の発音が悪すぎて聞き取れないと言っていた店員さんに「あなたはもういいから厨房の方に下がって。」と指示を出して私を救ってくれた。その時になってはじめてやっとあれが嫌がらせだったのだという事に気づいた。あの店員さんは困った顔で何度も何度も色んなイントネーションや発音で「ラズベリーパイとアイスコーヒー」と繰り返す私を見て楽しんでたのだ。あからさまな人種差別は無いが、そういう形での嫌がらせは残念ながらある。みんな通る道なので気にしてはいけなさと、駐在経験が長い日本人が後になって教えてくれた。助けてくれた店員さんは「あなたの発音は最初からちゃんと伝

わってたから大丈夫よ。遠くに居た私の耳にもちゃんと届いてたから。アメリカには色んな人が居るの。ごめんなさいね。」と謝ってくれた。その後、助けてくれた店員さんにはとても仲の良い日系人の友達が居て、その友達がいかにかいい人か、また嫌がらせをされている私を見て日系人の友達の事を思い出してとても心が痛んだことなどを話してくれた。私は助けてくれた店員さんに大変感謝したので、レシートのチップ欄には0円と記入して少し多めのチップを助けてくれた店員さんに直接手渡した。

このチップ制度、いい事をした人が報われる、頑張った人が報われるシステムとして使えるように思う。頑張っても、いい事をして、時給が一律なのはアメリカも日本と同じだ。もちろんチップ欲しさにただ媚びを売る店員さんが増えるような事は困るが、正直者が得をする、いい事をしたらいいい事で報われる、チップ制度は使い方によってそれを可能にしうるような気がする。

番外編：おもてなし in スペイン

昨年、スペインへ行った。一緒に観光していた友人たちととある美術館に行った所、残念ながら改装工事中で中に入る事が出来なかった。工事の埃よけのシートを見てドイツ人の友達が「ほー、これはすごい配慮だねえ。」と感心して言った。「どの辺が？」と私が聞くと、「だって中には入れないし、外側も改装工事中だけど、こんな感じの建物ですよって、来た人がイメージ出来るようにシートに写真をプリントしてるじゃない。これ見ただけで、本物の建物を見たような気になるじゃない。」との事だった。私からしてみれば写真は写真。のべつとして

いて、実に安物臭く、綺麗に修正がかけられていて、本来の建物の味などは全く感じられないので、特に何の感動もしなかったのだが、とにかくそのドイツ人の友人は「スペインはなかなかやるなあ。」といたく感動していた。東京オリンピック誘致の際に「お・も・て・な・し」とかいう殺し文句で誘致を勝ち取っていたが、日本人の考えるおもてなしと外国人が考えるおもてなしとはだいぶ異なる可能性があるかもしれないよと思った。



ドイツ人絶賛のスペイン流おもてなし